



筑波大学メールマガジン “ペデジャーなる” 2019年2月-冬号-

—OB・OG と学生を結びながら、懐かしさと新しさ香る筑波の風を季節の便りとしてお届けしていきます。

INDEX

1. 嘉納治五郎・金栗四三 特別展／山野実菜
—大河ドラマに筑波大学の面影が
2. 学生宿舎ができるまで ～茗溪会百年史から～／徳永翼
—宿舎に土足厳禁の時代があった
3. オランダのビールで「proost!」／越智小夏
—定番ビールとおつまみで一息
4. つくばの0円マーケットに参加してみた／添島香苗
—引っ越しに向けて断捨離!
5. 小説とわたし／吉永真理
—印象に残った小説のご紹介
6. 名画鑑賞で日々に潤いを／南陽花梨
—話題の「フェルメール展」に行ってきました
7. つくばでの私の思い出／前名裕一
—つくばの街で過ごした4年間は、本当に最高の時間でした
8. 地域住民の憩いの場 つくば子どもの家食堂／橋野朝奈
—つくば市にある子ども食堂の様子をお伝えします

1 嘉納治五郎・金栗四三 特別展



1月6日から大河ドラマ「いだてん」が放送になりました。これは東京高等師範学校(現筑波大学)出身の、「日本マラソンの父」金栗四三の半生を描いた物語です。ドラマの中には、大学会館前の銅像でおなじみの嘉納治五郎(東京高等師範学校校長)など、筑波大学ゆかりの人物・時代背景などが登場します。

これを記念して、『嘉納治五郎・金栗四三 特別展』が、それぞれ筑波大学体育ギャラリー前ホール、筑波大学体育ギャラリー(筑波キャンパス 5C棟 2階 5C209)にて1月22日から開催されています。

実際に行ってみると、小規模ではあるものの、金栗四三が練習用に履いていた足袋や多くの写真が展示されており、また、それぞれの略歴、経歴、関わった人物などが、わかりやすくボードにまとめられていました。

AR(拡張現実)を駆使した撮影が行えるコーナーもありました。撮った後、QRコードを読み取ればすぐに携帯電話に保存できる仕組みになっており、まるで金栗四三と一緒に撮ったかのような白黒写真を記念にすることができます。



あまりネタバレをしてしまうと、行く楽しみがなくなってしまうので、この辺りで。

この特別展は2019年12月25日まで開催しています。これから「いだてん」を観るための予習として、観ていない方も興味を持つきっかけとして、ぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

特別展の情報は、こちらのURLからもご確認いただけます→
<http://www.tsukuba.ac.jp/event/e201901221125.html>

(人文・文化学群 比較文化学類2年 山野実菜)



2 学生宿舎ができるまで ～茗溪会百年史から～



先日、「茗溪会百年史」という本を借り受けた。筑波大学やその前身の東京教育大学などの同窓会である茗溪会が明治 15 年に創設されて以来、百年間の活動を振り返った超大作だ。高等師範学校時代に起きた「帝大・高師合併論」や東京教育大学の筑波移転問題など、本学に関する重要なトピックが網羅してあるほか、学内外で活躍した会員の紹介にもかなりのページを割いている。例えば、現在放送中の大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺～」の主人公の一人である金栗四三については、10 ページを使いその功績をたたえている。ほかの記述も同じように詳細に記しているようなので、すべて合わせて 1148 ページのボリュームとなっていた。これだけでも内容の充実ぶりは十分伝わるだろう。

さて、その中に気になる部分があった。学生宿舎の建設にまつわるエピソードが記されていたのだ。筑波大は 70 年代の大学紛争の反省から、寄宿舎の管理を第三者である茗溪会に任せることに決めたという経緯があるため、百年史に記載があるのも頷ける(より詳しく説明すると、学生宿舎は筑波学都資金財団というところが管理しているのだが、それは本筋と関係ないので省略する)。その記述は読んでいて面白かったので、抜粋して紹介したい。

筑波大学は建学のときに工事の遅れがあった、というのは有名な話である。私は大学で地理学を専攻しているのだが、地理だとか歴史だとかを専攻していると、自分の通っている大学の地理や歴史についても気になってしまう人が一定数いるらしく、そういった人たちが集まって話をすると第一に出てくるのがこの話だ。もはや定番といっても過言ではない。「第一期生が入るまでに講義棟を完成させられなかったので代々木のオリンピックセンターで授業を行っていた」とか「学生がバイトで工事に参加していた」だとか、半ば都市伝説のような形で当時のあわただしさを示すエピソードは多数残されている。百年史にも阿部二郎所長の回想の形で、その様子が描かれていた。当初の学生宿舎は、工事のおくれもあって、道路や内庭が泥の山であったという。そのため、建物内は土足を禁じられ、スリッパを携行しなければならず、宿舎内には臨時のげた箱が設置されたという。

また、阿部所長の回想は共用棟の食堂についても続いている。当時の共用棟には食堂、喫茶室、理容室、浴室および売店が入っていたというが、食堂については「もともと、この食堂の企画と設計には、救うことのできないいくつもの大きなミスがあったのである」と強い言葉でその問題を指摘している。「毎日七百名の学生たちが、日に三度きちんと利用するという算定の基礎の上に、人から物まで万端にわたって無用不経済を度外視して、整備させた

のだったが、その都度払いの近代レストラン方式と、昔の寄宿舍食堂給食との勘違いも甚だしいことで、店開きはしたものの、またたく間に、閑古鳥が鳴く始末」。なんともお粗末な顛末ではないか。更には「おまけに、補食室利用の自炊生活を、はじめから勘定に入れずの企画だったので、不調不振に拍車がかかり、僅か一年足らずのうち、約二千万もの赤字に悲鳴をあげる仕末だった」とあるから、当時の所長の心労が気になってしまう。とはいえ、限られた期間の中で今までにない新構想大学を作り上げる過程にこうした失敗はつきものだったのかもしれない。

学生宿舎が1年ごとの入居になっている理由についても示唆があった。大学の初年度の入学案内書には、宿舎の入居が卒業まで保証されているかのように書かれていたが、石油ショックによる大幅な工事の遅れで宿舎不足に陥った。そのため、初年度に入居した学生の一部は宿舎を出ていかなければならなくなったという。百年史によると、これを不服とした学生ときちんとした説明をしなかった大学側に軋轢が生じたものの、宿舎の職員が仲介に入ったことで事態が収拾し、継続入居ができなかった九十名の学生は大学周辺や土浦市内に下宿を見つけることとなった。このときに入居していた学生が手続き上退去し再入居する形を取ったという。これが現在の1年ごとの入居契約の形態に繋がっているのは容易に想像できる。とある教授によれば、「元々大学周辺に住んでいた住民が薪を伐りだしていた林を大学に売ったため、新たな収入源としてアパート経営を始めたことから、すべての学生が収容できる宿舎の構想は周辺住民の反対されて頓挫した」という話もあるように、学生宿舎の建設過程については諸要素が複雑に絡まりあうこととは思うが、当初計画が達成されたとは言い難いことだけは言えるだろう。建学当初のマスタープラン作成に関わった人に話を聞いたことがあるが、「計画なんてあってなかったようなもの。とりあえず短い期間で急いで作った」とのことだった。当時の宿舎使用料は寄宿料1200円、共益費3800円の計月5000円（昭和49年度）。もはや隔世の感もある。

その後、宿舎には静脈認証システムやシャワー室の設置、シェアハウス型の新宿舎「グローバル・ヴィレッジ」の運営開始など大きな変化が幾度も訪れることになるわけだが、今回はここで筆をおくこととする。茗溪会では盛んにイベントを開催しているようなので、同窓生との交流がてら、宿舎の思い出を語り合うというのもいいのではないだろうか。余談だが、OBOGに聞いた宿舎の思い出で一番印象的だったのは、朝起きたら枕元で猫が寝ていたというエピソード。う、うらやましい……。

（人文・文化学群 日本語・日本文化学類4年 徳永翼）

🌸 3 オランダのビールで「proost！」



「proost！」みなさん、この言葉の意味が分かりますか？

発音は「プロースト」。オランダ語で「乾杯！」という意味です。オランダ、といえばあの有名な緑の容器のビール、ハイネケンを想像する人も多いのではないでしょうか。そう、オランダは隠れたビール王国。筆者は昨年、海外でさまざまなことにチャレンジしたい学生を支援する「はばたけ！筑波大生 武者修行支援プログラム」に参加し、オランダを訪れました。慣れない国で活動に奔走する中、貴重な息抜きとなったのがビールでした。

海外旅行や留学で、記憶に残るのはやはり現地での食事ですね。記事を読んで、大学時代に訪れた外国を思い出していただければ幸いです。それでは、オランダのビール事情を紹介します！

★ハイネケン

言わずと知れたハイネケン。日本で最も有名な外国のビールと言っても過言ではないですね。口に入れた瞬間のやわらかな苦みと香ばしさが特徴の、なめらかでクリーミーな泡立ちのビールです。

そんなリッチな泡立ちとコクを支えている秘密はその醸造方法にあります。ハイネケンは28日という長い時間をかけて醸造されていますが、これは平均的なビールの約2倍。そりゃ美味しくないとわけがないですね。

またハイネケンという名前ですが、これは製造者のヘラルド・A・ハイネケンがそのままブランド名と製造会社の名前になったもの。1863年の創立以降、現在はなんと世界170か国以上で販売されており、世界第3位のシェアを占めているのです。



(日本では主に缶で販売されていますが、オランダでは店頭でも瓶で販売されていることが多いです)

★定番おつまみ「クロケット」

クロケット クロケット コロケット コロケッ ……コロッケ！

多少無理がありましたが、そう、あのおふくろの味の定番「コロッケ」のルーツとも言われているのが、ヨーロッパの定番料理「クロケット」です。肉や野菜、イモ類などをまるめて揚げた料理の総称ですが、オランダのカフェでは主におつまみとして提供されていました。

しっかりした塩味が、コクのあるハイネケンとぴったり。おなかにもしっかり溜まり、手でも食べやすく、おつまみとして100点です！



(右奥に移っているのはチーズを春巻きのような皮に包んで揚げたもの。チーズの一大産地であるオランダならではのつまみです。クロケットは左。)

今回はオランダの定番ビールとおつまみについて紹介しました。バタバタとあわただしい年度末。オランダスタイルで一息ついてはいかがですか？

それでは、「proost!」

(人文・文化学群 比較文化学類3年 越智小夏)

🌸 4 つくばの0円マーケットに参加してみた

就職のため、もうすぐ6年間住んだつくばを離れる私。一の矢宿舎の小さな個室からスタートした私のつくばライフでしたが、アパートに移り、3年、4年と経つうちに、気づけばどんどん荷物が増えてしまっていました……。引っ越しに向けてモノを減らしたいな〜と思っていた矢先、気になるイベントを見つけたので参加してみることにしました！

*『0円マーケット くるくるひろば in つくば』

服や食器、雑貨など、家にあるまだ使えるモノを自由に持ち込んだり、持ち帰ったりすることができるイベントです。お金のいらぬフリーマーケット、と考えると分かりやすいですね。

モノが多すぎるこのご時世、「捨てたり買ったりする前に、ご近所みんなでシェアしてみよう」というコンセプトで、世田谷の主婦が一人で始めた活動なのだとか。その後、同様の活動が全国に広がり、つくばでも2015年3月にスタート。現在、年に数回、不定期で開催されているようです。私は、1月27日（日）12～14時につくばセンター広場で行われた回に参加してきました。

*家にある不用品を集めてみる

持ち込める品の条件は「お友達にあげられるくらいの状態であること」。それを念頭に家の中を見渡すと、ずっと処分に困っていたモノから「まだあったの!？」というモノまで、いろいろ出てきました。



学習機に付いていたコルクボード、大学受験の参考書、なぜかある花のレイ、メルカリに出しても売れなかった服たち、小学生の頃友達と交換していた大量のメモ用紙、もう飽きてしまったアニメのグッズ、マクドナルドのハッピーセットのおまけだったポケモンの下敷き、宿舎時代に使っていたジョイント式のマット、などなど……。中にはがらくた同然のモノもありますが、果たして貰い手は現れるのか?!

*会場は持ち込み・持ち帰り自由

当日、不用品が詰まったスーツケースを引きずり、やや緊張しながらつくばセンター広場へ。どこだろう、ときよろきよろしていると、旧ライトオン本社ビルの脇に小さな人だかりを発見しました。



木にくくりつけられた看板が目印。イラストが可愛い！

スタッフの方に聞くと、ビニールシートの上に持ち込み品を置けば良いとのこと。フリーマーケットのように出店の登録をしたり、店番をしたりする必要はなく、とってもシンプル。早速、持ってきた不用品たちを並べていきました。



会場はこんな感じ。洋服はハンガーラックに掛け、雑貨類はビニールシートの上に置いていきます。



貰い手を待つコルクボードと下敷き。

コレ欲しい人いるのかなぁ、と半信半疑ながら持ち込み品を並べていくも、置いたそばから花のレイとジョイント式マットを紙袋に入れているおばさまを発見！ 参考書も、制服姿の男子高校生数人が手に取っていて、次見た時には無くなっていました。持ってきたものが誰かに必要とされ、貰われていく様子を見るのは嬉しい。このイベントの醍醐味な気がします。私もちゃっかり、帆布製のリュックをゲット。状態も良く、いまでは外出に大活躍しています。

イベントが終わる 14 時頃に再度会場を訪れると、ビニールシートに並んでいた品々はほとんど無くなっていました。残った不用品も、持ち帰る必要はないとのことでした。

いらないけどまだ使えるからと押し入れに眠らせているモノ、沢山ありますよね。そんなモノたちを気軽に気持ちよく手放すことができる、とても良いイベントだと感じました。もちろん持ち帰りだけでの参加も OK なので、お宝を発掘しに行くのも良いと思います！

つくばでの次回の開催は、3月16日（土）の10～12時、天久保2丁目のパン屋「ベッカライ・ブローツァイト」さん前だそうです。興味を持たれた方、のぞきに行かれてみてはいかがでしょうか？

0円マーケット くるくるひろば inつくば

<http://kurukurutsukuba.blog.fc2.com>

(生命環境科学研究科 生物科学専攻 博士前期課程2年 添島香苗)

5 小説とわたし



これまでの人生で最も頻繁に小説を読んだのは中高生の頃でした。毎日図書館に寄り、日々何かしらの物語を追って過ごした記憶があります。

大学生になって、小説に触れる時間は明らかに減りました。小説から遠のいた理由は、忙しくて読む時間がないから、だけではないような気がします。空想や夢想ばかりせず、自分の外側に、現実にもっと目をむけようと、あえて遠ざけていた節もあるのです。

中高時代は超が付くほど内向的で夢想家で、現実の問題に真っ向から向き合うことが苦手でした。そのような性格を少しでも変えたいと思い、大学入学を機に、積極的で外交的な活動を目指してさまざまな挑戦をしました。3年経ち、昔よりは現実に向き合う力がついたのではないかと内省しています。

しかし本来、私は空想や想像の中で生きる方が楽で、その性質は今でも変わっていません。大学生活の中で何もかもがうまくいかず、どうすればよいか分からなくなった時、夢想家の性質が顔を出し、小説や誰かの思想の中に逃げました。大学に入って読書量は減りましたが、その分、行き詰ったときに会った本の影響力は強く、この数年で読んだ本それぞれに特別な思い入れがあります。

前置きが長くなりましたが、今回は勝手ながら、ここ数年で読んで印象に残った数冊の本の中から1冊をご紹介します。なお、かなり個人的な内容になってしまうことをここでお詫び申し上げます。

・「デミアン」ヘルマン・ヘッセ著（岩波文庫）

ドイツの大作家が手掛けた名作です。主人公ジンクレールは、家族や教会が築く明るく清純な世界と、凶悪な犯罪や悪い噂が横行する暗くて残酷な世界のはざまでそのどちらの世界にも心を惹かれ、葛藤します。そんな中、デミアンという不思議な少年が現れ、哲学的な示唆でジンクレールを導くのですが、ある日デミアンは突然姿をくらましてしまいます。その後、ジンクレールはデミアンの概念のようなものを追い求めながら、自己の内面の探求を実現させる内容となっています。

この本を読んで最初に思ったのは「ジンクレールは私なのか」ということです。今までの読書体験では味わったことのない、深い共感をこの本で得ました。

デミアンに出会ったのは大学2年生の春ごろで、人間関係や自分の在り方について悩み、孤独感に苛まれていた時期でした。そんな時、周りの誰かと話してもたどり着けない共感の境地みたいなものをこの本の中に見出し、やりきれない気持ちに寄り添ってくれた、救われ

たと感じ、ほっと一息つけました。共感が安心に繋がったのです。

これを読んで世界が変わった、などの賞賛の文句が優れた本に添えられることは多々ありますが、私は、時代、性別、国なに一つ同じくせずして本質的な共感を呼び覚ます本にも魅力を感じます。今後考えが変わってデミアンを読んでも共感できなくなる時が来るかもしれないですが、大学2年生の春、この本に救われたのだという記憶はいつまでも残るだろうと予感します。

(生命環境学群 生物学類3年 吉永真理)

6 名画鑑賞で日々に潤いを



1月10日、寒い晴天の日、私は上野を目指してつくばエクスプレスに乗車しました。上野は美術館がたくさんあるので以前から何度か訪れているのですが、今回のお目当ては上野の森美術館の特別展、「フェルメール展」です。この「フェルメール展」は【国内過去最多の8点の作品を展示】というのが売りで、その8点が全て1つの部屋に収められているということも非常に注目を集めています。私は当日券を美術館の窓口で購入したのですが、平日の昼過ぎにも関わらず多くの人で美術館前がごった返しており、その盛況ぶりにとても驚きました。またチケットも日時指定入場制となっており、13時過ぎに美術館に着いたときには15時入場のチケットしか販売されておらず、事前に調べて来るべきだったと反省したのです。

そんな事情で2時間ほど時間が空いたため、近くにある国立西洋美術館の常設展へ向かいました。筑波大学は国立西洋美術館のメンバーシップに加入しているため、学生は常設展に無料で入ることができ、時間を潰すにはぴったりです。国立西洋美術館の入り口にはロダンの彫刻作品がいくつか飾られており、中には有名な「地獄の門」もあります。常設展の中は中世の宗教画から印象派など近現代の絵画、さらにはジュエリー作品まで、さまざまな作品が展示してあり、2時間では足りないほどのボリュームでした。中でも私が気に入ったのは、ポール・シニャックという画家の「サン＝トロペの港」という絵です。シニャックは「新印象主義」という派閥だそうで、たしかに印象派のモネやルノワールに似た曖昧な筆遣いに魅力を感じます。しかし近寄って見てみると絵全体が2cmほどの均一な太い線で描かれていることに気づき、曖昧かと思われた筆遣いに繊細さを感じます。これほど遠近で表情を変える絵には出会ったことがなく、大変惹きつけられました。

さて、国立西洋美術館で絵画を眺めているうちにあっという間に 15 時になり、足早に上野の森美術館へと戻ります。フェルメール展に入ると、まずは当時のオランダの繁栄の様子やフェルメールと同時代の画家の説明があります。この導入によりフェルメールの生きた時代やフェルメールが描いた人々の生活がより鮮やかに想像できるようになったところで、いよいよフェルメールの作品の展示室へと入っていきます。展示室の中は予想通りの人ばかりで、まずはその熱気に圧倒されてしまいますが、人をかき分けて絵画の前まで進むと今度は絵画の魅力に飲まれ立ち尽くしてしまいます。私が一番に見た作品は、日本初公開の「ウィングラス」でした。光の魔術師とも称されるフェルメールらしく、左側の窓から入る光と陰の対象が非常に鮮やかです。更にその明暗と対比するように描かれた男女には、一体どんな駆け引きがあるのか、想像を掻き立てられるのでした。更に進んでいくと部屋の最後には有名な「牛乳を注ぐ女」が展示されていました。「牛乳を注ぐ女」は女性の黄色い上着と青い腰巻の色彩が非常に美しく、時間を忘れ見入ってしまいました。また、驚かされるのはその小ささです。フェルメールの作品はどれも小さく、「牛乳を注ぐ女」も高さ 45.5cm×幅 41cm しかないのだそうです。そんな小さなキャンバスの中に様々な小物を散りばめ、それらの質感を正確に再現しながら絵に物語を生むというのは、やはりフェルメールの凄さであると思いました。

こうしてあっという間に 1 時間が経ち、フェルメール展を後にしました。企画展そのものは思いのほか短時間で見終わりましたが、やはりフェルメールの絵ひとつひとつの熱量からか、外に出るころにはくたくたになっていました。上野の森美術館での「フェルメール展」は 2 月 3 日をもって終了してしまいましたが、今度は大阪市立美術館で 2 月 16 日から 5 月 12 日まで開催されるそうです。忙しい日々の憩いに、ぜひ名画を鑑賞してみてくださいはいかがでしょうか。

(人文・文化学群 日本語・日本文化学類 4 年 南陽花梨)

7 つくばでの私の思い出



卒業を間近に控え、つくばの街で生活するのもあとわずかになりました。つくばで過ごした 4 年間は、長いようで短く、本当に充実した日々でした。かなり個人的な話にはなりますが、今回は大学内やつくば市の思い出の場所について書こうと思います。

・MOVIX つくば

筑波大から自転車で2～30分ほどで到着するショッピングモール「イーアスつくば」の3階にある映画館です。イーアスは休日の買い物やイベントで数えきれないほど訪れましたが、この映画館が一番のお気に入りです。遊ぶ場所が少ないつくば市の中で、映画は私にとって数少ない娯楽であり、また私の地元は映画館などないかなりの田舎だったので、映画館が近くにあるということだけでも感動ものでした。

そんなMOVIXには1年生の時から、見たい映画があれば必ずと言っていいほど通って来ました。つい先日、アニメ映画「ラブライブ！ サンシャイン！！ The School Idol Movie Over the Rainbow」を観てきたばかりです。映画館のロビーの上にある大きな画面に映し出される最新映画の宣伝や、休日の大混雑を見ると、今日も来たんだ……とちょっとした興奮を感じていました。



私が見てきた「ラブライブ！ サンシャイン！！」のパネルです。光の反射で見えにくくなっていますが、後ろには売店があります。日曜日に行ったので、売店もスクリーンの入り口も大混雑でした。

心が踊る展開のアニメ映画や涙を誘う恋愛ものなど、MOVIXで観たたくさんの映画が楽しい時間を与えてくれました。授業や課題で忙しい中でも、映画は最高の娯楽であり、大切な癒しでもありました。そんなMOVIXは、地元には縁がなかった映画に触れられ、映画の面白さに気づかせてくれた場所でもあります。

・つくば駅

東京との玄関口で、つくばエクスプレスの終点でもあるつくば駅も、私にとって思い出深

い場所です。限定の商品を買いに朝早く秋葉原へ向かったことや、受験で初めて降り立った時の緊張感、つくばエクスプレスに乗って旅行へ行く時の興奮など、4年間で本当にたくさん利用して、星の数ほどの思い出もできた場所です。

ホームに電車が入ってきたときの風の強さや、高いな〜と思いながら見ていた運賃表、出かける前にほぼ必ず立ち寄ったファミリーマート、皆さんにとっては当たり前のような光景も、私にとっては大切な思い出です。映画館同様、地元で鉄道がなかったので運賃が高くても速く、東京へとつながる鉄道があるということだけでも感動ものでした。

私にとってつくばエクスプレスは、まさに「栄光に向かって走る列車」です。つくば駅の光景は、私がつくばを離れてもまたつくば駅からつくばエクスプレスに乗りたいと、思わせてくれます。

・中央図書館

私が大学4年間で過ごした筑波大は、ここには書ききれないほどの思い出と心に残る場所がありますが、今回は特に思い入れのある中央図書館について書きます。

筑波大生なら一度は利用したことがあるはずの中央図書館。私も1年生の時からお世話になってきました。初めて図書館に入ったときは、大学の図書館ってこんなに大きいんだな……！と感動と興奮が入り混じった感情だったのを今でもはっきりと覚えています。図書館で課題に必要な資料を探したり、夜遅くまでレポートを書き続けたことや、新聞を読み漁ったことが昨日のここのようによみがえってきます。勉強で困ったことがあれば、いつも立ち寄っていました。私が大学生活で得たものは、中央図書館なしでは手に入れることができなかつたものばかりです。

卒業したら二度と利用することはないでしょうが、中央図書館は私の4年間の大きな支えでした。記事の中では伝えきれないほどの思い出が筑波大にはありますが、大学の中では中央図書館が一番のお気に入りであることは、自信を持って言えます。

私は就職に伴い、つくば市から遠く離れた場所に引っ越します。4年間で過ごしたつくば市を離れるのは正直心寂しいですが、永遠の別れではないと確信しています。もう一度つくばの地を踏むことを誓い、新しいスタートを切ろうと思います。

(社会・国際学群 社会学類4年 前名裕一)

8 地域住民の憩いの場 つくば子どもの家食堂



読者の皆さんは、「子ども食堂」をご存知ですか。子ども食堂は、子どもやその親、地域住民に対して、安価で栄養のある食事や居場所を提供する活動です。近年メディアでも多く取り上げられるようになり、現在では全国各地に約 2300 箇所もあると言われています。子ども食堂というと、貧困の子どもや孤食の子どもが集うイメージがあるかもしれませんが、実際はお子さん連れの家族や地域住民の方も多く訪れ、老若男女問わず交流ができる温かい場所です。今回は、つくば市にある子ども食堂「つくば子どもの家食堂」でボランティアとして参加している筆者が、子ども食堂のとある 1 日を現場からレポートします。

15 時ごろ、ボランティアたちが集まり始めます。この日のメニューは、チキンと白菜のクリーム煮、ナポリタン、オレンジゼリー。毎回栄養のバランスが考えられた食事で、訪れる方々に大変好評です。クリーム煮は、ベシヤメルソースから手作りするという本格派。鶏肉と野菜で具沢山の鍋は、かき混ぜるのにも一苦労です。



そんな中、オレンジゼリーが固まらないというハプニングが発生。思わぬハプニングにもスタッフの連携プレーで対応していきます。主婦のボランティアの方のアイデアで、固める前の液を一度加熱するといったひと手間を加えることで無事固まりました。どうやら、果汁 100 パーセントのオレンジジュースを使用したことが原因だったようです。

完成した料理はこちら。彩り豊かで香りもよく、食欲がそそられます。



17時半ごろからお客さんが徐々に集まります。日によってお客さんの数は異なりますが、大鍋いっぱいを作っても無くなってしまふことがあるので、お客さんの多い日は内心ヒヤヒヤします。なによりもうれしいのは「おかわり！」の一言。野菜嫌いのお子さんがこの食堂で野菜を食べることができた、といううれしい報告を聞くと、心が温かくなります。食事が終わると、子どもたちは走り回るなどして遊ぶ一方で、大人たちは和やかに談笑しています。その様子を見ていると、子ども食堂が単なる炊き出しの場ではなく、地域住民の交流の場になっているのをひしと感じます。

子ども食堂は「貧困対策」と言われることが多いですが、子ども食堂が貧困問題を根本的に解決できるとは私は思っていません。そもそも、食事を安価で食べることで解決するほど、相対的貧困は簡単な問題ではないからです。しかし、「交流の場」としての機能が、貧困だけでなくさまざまな悩みを抱える方の救いになる可能性を感じています。

この記事を読んで、子ども食堂を少しでも身近に感じてくれる方がいたらうれしいです。最後まで読んでいただきありがとうございました。

<つくば子どもの家食堂>

茨城県つくば市北中妻 399-2

電話：029-838-5366

Email：sun-sun-kids-gakudou@mannarz.com

ブログ：<https://ameblo.jp/kodomo-syokudo/>

毎月第1・第3水曜日 17：30～19：00

幼児：無料／小中学生：100円／高校生以上：300円


(人文・文化学群 日本語・日本文化学類4年 橋野朝奈)



🍷 『編集後記』

ペデジャーなる読者の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。編集長の前名裕一です。寒い日が続き、またインフルエンザの流行が連日報道され、何かと体調に気を遣う季節ですが、読者の皆さまがお元気に生活されていることを願っています。

今年の冬も、つくば市も含め、関東地方に雪が降りました。筑波大でも一面の雪景色が広がり、石の広場近くの芝生には雪の日恒例？ の雪文字が書かれていました。ちなみに

今年は「落単」と書かれていたそうです。誰が書いたのかはわかりませんが、何気ない日常のちょっと変わった出来事に、筑波大の冬を感じる場面でした。

今回もたくさんの記事が執筆され、読者の皆さまにつくばの今を伝えられたと思います。私自身、編集作業に携わってみて、こんなことがあったんだな、と新たな発見の繰り返しでした。身近に思えるところでも、私の知らない出来事が日々起こっていると思いつつ記事を読み、編集していました。

この冬号で、今年度の配信は終了します。今年も読んでいただき、誠にありがとうございました。また来年度からも、ペデジャーなるでお楽しみいただければ幸いです。

(社会・国際学群 社会学類4年 前名裕一)



筑波大学のいろいろな取組みのご紹介

嘉納治五郎・金栗四三特別展



東京高等師範学校(現筑波大学)出身の、「日本マラソンの父」金栗四三の半生を描いた大河ドラマ「いだてん」が1月6日から放送になりました。ドラマには、金栗の才能を見出した「柔道の父」「教育の父」として知られる嘉納治五郎(東京高等師範学校校長)など、本学ゆかりの人物・時代背景などが登場します。

これを記念して、『嘉納治五郎・金栗四三 特別展』を会場を分けて同時開催しております。各会場では、金栗四三が練習用に履いていた足袋をはじめとする本学とオリンピック・パラリンピックのかかわりなど多数を展示しています。

また、筑波大学サテライトオフィス及びつくば市交流サロン(BiVi つくば内)において、「いだてん～東京オリムピック噺(ばなし)～」の番組展を開催しております。「番組紹介パネル」「出演者等身大パネル」「衣装」や「小道具」を展示しています。併せてご覧ください。

主催：NHK サービスセンター

後援：NHK 水戸放送局



▽▼詳細はこちら▼▽

<http://www.tsukuba.ac.jp/event/e201901221125.html>

📌 筑波大学カード

筑波大学公式クレジットカード「筑波大学カード」新規入会者募集中です！

平成 30 年 12 月 1 日から新規入会利用キャンペーン中！！

筑波大学カード 新規入会利用キャンペーン

最大 2,000円 ギフトカードプレゼント

12月1日から START

インターネットからもお申込みいただけますので卒業生の皆様もぜひご利用ください！

《筑波大学カードをご利用の場合》

- ・ 利用金額の一部が筑波大学基金へ寄附
- ・ サービス協力店舗での優待利用可能

詳しくは、<https://alumni.tsukuba.ac.jp/cashcard.html>

をご覧ください。

- 📧 筑波大学 公式ホームページ: <http://www.tsukuba.ac.jp/>
- 📧 筑波大学 facebook : <https://www.facebook.com/univ.tsukuba.ja>
- 📧 筑波大学交流広場「KUTTUK ba」: <https://alumni.tsukuba.ac.jp/>
(筑波大学交流広場／筑波大学生涯メールアドレス 利用登録募集中!)
- 📧 編集・発行:「ペデジャーなる」編集ワーキンググループ
- 📧 デザイン・配信作業:国立大学法人筑波大学事業開発推進室
- 📧 ご意見・問い合わせ先:国立大学法人筑波大学事業開発推進室
〒305-8577 茨城県つくば市天王台1丁目1-1
TEL:029-853-2030 FAX:029-853-6576

メールマガジンの一部または全部を無断転載することを禁止します。
Copyright © 2014 University of Tsukuba. All Rights Reserved.